歯形残して愛しらず

紙粘土

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バイオ６　ジェイクの話。　戦場で悲しい女に出会う。

ゲーム本編より数年前。

恋愛っぽい描写がちょろっとありますが、シェリーと出会うより昔のためシェリーの存在は考慮されていません。相手女性はオリジナルなのでオリ主タグを入れましたが、名前表記無し・容姿についてもあまり言及していないので、キャラクター性はあまりないかもしれません。

過去は全て捏造です。

目次

1話 —— 1
2話 —— 15
3話 —— 26
終話 —— 40

1話

―1―

女っていうのはあまり良くない。すぐ泣くしすぐに騒ぐし、すぐに死ぬのだ。

少なくとも、彼の周りにいた女性はみんなそうだった。だから彼は女性をそばに置きたいなどとは考えないし、行動を共にするなど以ての外で、まして恋人などとはちゃんちゃらおかしいと考える。溜まるモンが溜まった時に、抱けりゃあそれだけで充分だろう。それ以上はむしろ要らない。そう考えていた。

これはそんな考えを否定してくれる存在と、出会うより前の話になる。

誰にも話すつもりはないし、きっとこれからもないだろう。ただ時々、思い出すことがあるだけだ。

夕日が沈む。

自らの影が濃くなってゆく。この黒々とした色を見てると、不意に思い出す女がいるのだ。

あれは恋などではなかった。彼女はこれまで嫌煙してきた女となんら変わることなく、よく喋り、穏やかで、そしてアッサリ死んだのだから。

だから、ジェイクは〝彼女〟を好きなどとは決して思わない。ただ、死んでほしくもない女でもあった。

〝彼女〟は、ジェイクにとってそういう女であったのだ。

―2―

軍部のクーデターによる内戦勃発、隣国との摩擦による紛争悪化。国内外で量産されては紛争地帯になだれ込んでくる傭兵たちは、量産品ゆえの消耗品のような扱いだった。

各方面と続く長い長い戦いに疲弊が溜まれば、当然ながら戦力は落ちる。とならば補給はままならず、前線の兵たちは乏しい弾薬や食糧で戦線を維持しなけりゃならない。言うまでもなく、士気は下がり戦果らしい戦果などあがらないのだ。有史以来、補給が途絶えて勝利した軍勢など存在しない。

十八を迎えて間もない春の早朝だった。イドニアは熾烈な内戦のせいでその日も朝から消炎臭く、殺伐とした空気が鬱蒼と立ち込めていた。

彼の所属する反政府軍がばたばたと煩くなった午前五時、彼は敵襲でもあったものかと身構えた。各々銃を手に走り回る傭兵の一人が、「お前も早く来い」とライフルを投げる。

――――おいおい狙撃なんざやってられるか。そう吐き捨てたのがその日最初のため息だ。

曇りだった。

厚い雲が太陽をすっぽり覆い隠してしまい、空は一面灰色である。雨の降りそうな気配はないが、当分晴れ間も来そうにない、そんな天気。

根城としていた廃ビルを出て先ず目に入るのは黒煙だった。細く、霞みながらも天に向かう黒煙は、ジェイクにのたうつ龍を連想させる。

鼻をつくのは人の焼ける臭いであった。それから饐えた火薬の匂いや、金属の酸化してゆくそれも混ざり合い、一言で言うと一帯が酷い悪臭に侵されている。

ひがな顰めっ面ばかりの彼の眉間の皺が、益々深い溝を刻んだ。が、この時ばかりは誰も彼も皆同じような表情だった。

「おい、一体何のバーベキューだ?・」

煙の根源は瓦礫の山の向こうにある。目を凝らせどもその正体は見えないが、なんと

なく察しはつくものだ。車か戦車か定かでないが、この先に丸焼けの車両があって、きっと運転手も死んでるのだろう。
声をかけた男が首を縦にふる。ハイネックを鼻まで引っ張り、この悪臭をなるたけ塞いでいるようだ。
「ヘリだ。国は知らんが、墜落してきた。どうやら運搬機って話だよ。儲けモンだな」
足元の瓦礫を蹴飛ばすと、その影から鼠が逃げる。悪臭を堪えて近付けば、ひしゃげたヘリがそこにはあった。半壊したハッチの中は未だ火の手が残っているが、外側の部品は大方燃え尽きてしまったらしい。
苦しんだ痕跡を残して突き出された男の腕が、その凄惨さを物語る。物資がどうのと言っちゃあいたが、こいつは全部炭になってしまってないか。コックピット側に回って見れば、操縦士は窓に突っ込んで首の骨を露出させてた。
ヘリの消火が完全に済んだのは昼前である。
機銃が搭載されてたことや積荷が武器類であったことから、自然鎮火を待つよう方針が変わったためだ。下手に手を出して爆破に巻き込まれてはたまらない。
すっかりローストされた機内の有様は酷いものだが、いくつかの機器はまだまだ使えそうなものだった。嬉々として皆々銃器や弾薬、無事な通信機材を運び出す。

ジェイクは少し離れた丘の端、国境を分かつ壁に寄り掛かってそれを見ている。……蟻のようだと、彼は思った。煤だらけで黒々とした者どもが一列となり、積荷を住処に運んでく。なんとも言えぬ不快感が胸の奥につかえてる。

その時だ。些細な物音とほぼ同時に、背後で「ヒュ」と動揺を孕んだ吐息が聞こえた。それは今の今まで存在を気取らせないほど気配を殺すことに徹していたのに、不意の物音に焦りを露呈させてしまったような、愚かで未熟な吐息であった。

ジェイクが振り返る。後ろにあるのは大きな壁だ。壁としか形容しようのないものだ。

ここいらの丘は昔流れていた川の名残で出来ている。かつてあったそっ川こそが、国と国の境目だった。内戦がここまで激化するより昔は、国境はフェンスで区切られていた。が、フェンスで区切った国の境など無いもののように無視され続け、見かねた政府が築き上げたのがこの壁である。

壁の厚さはどれほどあるのか、簡単に蹴破れないだろうことは感触でわかる。高さは二メートルをやや越える。しかし所詮はただの石壁であり、越えようと思えば――少なくともジェイクの身体能力ならば、容易く越えられる程度のものだ。

動揺したような、躊躇いがちな小さな吐息は、そんな壁の向こう側から聞こえてきた。直線距離にして数メートルもないというのに、この向こう側は外国である。ジェイク

は周囲を見渡した。幸いなことに今は誰も近くにいない。
　イドニアは周辺諸国とも不安定な状態で、隣国はすなわち敵国だった。
　きっとここに人がいると知れたのならば、厄介ごとになっちまうだろう。わかっていたから、ジェイクはぶっきらぼうな声だった。
「……そこに居る奴、消えろ」
　かさ。
　草を踏みつけた音であろうか。間違いなく人の気配が、壁の向こうで戸惑っている。
　戦闘員ではないと思った。なぜなら、息遣いや気配なんかが、怯えたように激しく動揺してたから。
「一言も喋るな。存在を認めたら、この壁を登って撃つ」
　ジェイクは傭兵だ。彼の敵は彼自身ではなく雇い主に決められる。
　そして今の雇い主は、イドニア政府も隣国も、等しく敵と見做してる。見つけたら問答無用に殺してしまうのが、彼の〝今の〟仕事であるのだ。

かさ、かさ……。
草の踏まれる音がする。
この辺りの植物はみな背丈の低い雑草ばかりで、疎らなタンポポも風に煽られては綿毛を散らす。きっと、この壁の向こうも同じ景色が広がっている。
ジェイクはため息をそっと漏らした。足音が、少しずつ小さくなってゆくから。

「……にいさん」
去り際に小さな声が聞こえた。
それは、涙に濡れたか細い女の声だった。

―3―
この辺りの国境付近は、国内でも一、二を争う熾烈な紛争地帯だ。間違っても半べそかいた女のうろつく場所ではなかった。

だからジェイクは、あれは売られた女かなにかと思った。
男というのは勝手に性欲が溜まって行くのだが、紛争地帯じゃ女なんかどこにも居ない。娼婦を買おうにも売春宿の一つもないのだ。そこで街から女を買って来るならまだマシなほうで、拉致してくるような連中もいた。国境の向こうとてその辺りの治安は大差なさそうだから、とかくそんな〝可哀想な奴〟だと思った。
「ジェイク……疫病が怖くねぇのかい」
燃え尽きたヘリの中身は大方の荷物が搾取されたあとであったが、死体には誰も触れてなかった。
操縦席でローストされてた男の腰に米国の最新型の銃を見つけて、取り外してた時である。同じ傭兵部隊に属する男が、そんな言葉をかけてきたのは。
「この所バケモンみてぇなのをたまに見るだろ? ありゃあ新種の疫病だってみんな言ってら」
戦場がウイルスや病原菌の温床となるのは昔っからだ。理由は単純に死体がいくらもそこいらに転がってるから。鼠なんかも群がってくる。
だがジェイクは鼻で笑って、気にする様子もなく銃を手にした。
「……さあな」

返事などたったのそれだけだったし、事実彼は欠片も心配していなかった。自分はウイルスや菌に対して、人より遥かに強い身体と自覚してたのだ。自分が命の危険を感じるのは菌やウイルスではなく「生きた敵」である。だから、存在するかもあやふやな病気の心配よりも、目の前の武器のが大切だった。
やれやれと言いたげに仲間が離れる。そこでふと、彼は遺体に視線を落とす。弾倉を確認する刹那のことだ。
操縦席の男がその手に、なにかを握り込んでいた。

——ペンダント？
こんな金目のものを他の奴らが見落とすくらいだ、よほどみんな「バケモンになる疫病」とやらを恐れているのか。興味本位に指を伸ばせば、遺体はあっさりそれを手放す。すると同時にチャームが開いた。どうやらロケットペンダントらしい。
中身は写真だ。年の近い男女であったが、恋人でなく兄妹であるとすぐにわかった。顔がそっくりだったから。
だがジェイクが思わず驚いたのは、写真が出てきたからではない。

〝……にいさん〟

壁の向こうで小さく聞こえた、女の言葉を思い出す。

落ちたヘリ。
壁の向こうで泣いてた女。
兄妹の写真を持つパイロット。
小さく聞こえた「にいさん」の声。

ああ、いやな連想をしちまった。
ジェイクは思わず空を仰いだ。

・・・

黒一色の夜空にぽつぽつと星座が瞬いている。
ジェイクは苔むした壁に背中を預け、なんとはなしにそれを数える。
散らばる星々のどれかは有名な星座だろうか。彼にとって星とは方角を知るためだ

けの知恵だったから、それ以外のことを知らない。
不意に風が吹く。戦場とは思えない静けさが身を包み、えもいわれぬ物悲しさが心をふさがせる。何度目かも数え忘れたため息が落ちた。
手の中には、あのロケットペンダントが握られている。
ヘリを落としたのはジェイクではない。しかし積荷を奪ったのは仲間であった。事実ジェイクも銃を奪った。
弱肉強食の戦場において、これは当然であり日常茶飯事と言っていい。だのに胸糞の悪さを感じるのは、きっと、どこかで予想していたからだ。予想していて、その予想が当たってしまった。……ここに、またあの女が来るということ。
控えめな足音を壁の向こう側に気付いた時から、ジェイクは似合わない祈りを捧げた。せめて、もう一つの予想は外れてますように。
「……なにしに来たんだ」
他の誰かと間違える心配はしちゃいなかった。なにせ足音は男より軽く、男にはないヒールの音を持っている。おそらくパンプスのような、尖った靴を履いてるのだろう。こんな足音が、戦場にいくつもあるはずもない。

「撃ち殺すと言ったはずだぜ」

なにをやっているんだろうか。あまりに愚かな自問自答を脳内でする。例え死んだパイロットがこの女の兄であっても、だからどうということもないのに。

左腕のかすり傷は、今日新しくこさえたものだ。夕方の一悶着のお土産だった。

国境の向こうから攻めてきたのは自らと同じく傭兵達で、ここより数キロ南で衝突があった。そこは国境に沿って続くこの壁が、砕けかけた地点でもある。

相手の雇い主が誰なのか、何故ジェイクの属する傭兵部隊を襲ってくるのか、そんなことは部隊の誰もわからなかった。ただ、確かなのは敵ということ。そして、敵は殺さなければならないということ。

「……〝こっち側〟にお前の兄貴がいてもいなくても……やることは変わらねえよ」

言いながら握りしめたグリップからは、銃の重みが伝わってくる。誰かを殺すためだけの鉄の重みだ。

「…………ヘリは、落ちましたか」

ややあってから空気に溶けたその声が、思えば彼女の発した初めての問いだ。

どくん。一度心臓が高鳴った。それは不似合いな、罪悪感にも似たものだった。

「ヘリなんざしょっちゅう落ちてくる」

ややあってからジェイクは答える。鼓動はまだ速いまんまだ。

「昨日です、……いえ、日付は変わっていたかも。深夜から明け方にかけて、イドニアに発った兄のヘリが対空砲に狙われました」

ロケットペンダントの中で微笑む兄弟は、幸せに溢れた目をしてる。ペンダントの持ち主――――パイロットは皮膚が炭のように変色していた。この写真の面影など残らぬくらいに。

では、妹は。

女は戦場では滅多に見ない。家族は、妹は、どこか遠い街中でのほほんと暮らしてるものだ。間違ってもこんな壁一枚向こう側から、声を出したりしてはいけない。手の中の銃がいやに冷たい。手に馴染むほど撃ち続けた武器であるのに、ひどい異物感に覆われてゆく。

「……知らねえ」

ジェイクは言った。胸がきりきりと痛かったけど、その原因もわからなかった。

「ヘリはしょっちゅう落ちてくる。上手くかわして、飛んでくヘリはもっといる。昨日も同じだ。落ちたヘリも、落ちなかったヘリもあった。
お前の兄貴のヘリなんか知らねえ」

この女を殺せば、自分の功績は上がるだろうか。
あるいは生け捕りにして売り渡せば、別途で報酬が貰えるだろうか。
……それは、リンゴいくつ分の価値なのだろうか。
あまりに嫌な思考回路で、気が付けば自己嫌悪に襲われていた。

2話

―1―

「ジェイク、撃てよ！」
「今やってるだろうがっ」
朝っぱらから嫌になる。それがその朝の感想だった。
銃声がガタガタ鼓膜を震わし、どこぞしこから硝煙が上がる。誰かが叫び、誰かが呻いた。怒号と悲鳴が混ざり合ってく。
「ケイシーがやられたっ」
「あいつら、クソッタレめ！」
仲間の一人が怨みを吐いた。
ジェイクは黙って銃を撃つ。国境の向こうから攻め入る敵は大勢で、装備も充実したものだった。中には防弾ベストやフルフェイスなどで、身体を守る者もいる。
障害物の影に犇めきながら、着実にイドニアへ侵食してくる。
「クソが!!」
一際高い声が聞こえた。

怒りと恐怖を綯交ぜにした、嫌な嫌な声だった。
「……なんだ？」
「……、アッチにも精鋭がいるんだろうよ」
尋ねても返答はぶっきらぼうなものである。
目を細めれば、壁の向こうに車両が見えた。武装車両だ。
なるほどあれかと納得をする。精鋭ともならば乗るものが違う。なにせ民兵なのに戦車の操縦を心得てるのだ。
「割に合わねえな」
「同感だよ」
嫌な朝だ。
またどこかで血が飛び散った。

・・・

一人殺されては一人殺す。
それを無為と呼んでしまったら、自らの存在意義がなくなってしまう。
一先ずは沈着した衝突の後に、残された遺体の数を数える最中も罵倒の言葉はあちら

こちらから止まらなかった。
　奴らは国境の向こう側から、時に散発的に、あるいは突発的に、総じて積極的な攻撃を仕掛ける。国境付近に陣をとるジェイク達が邪魔であるのか、ジェイク達の抹殺そのものが目的なのかはわからない。ただ攻撃は執拗だった。
「おーい、こっちもだ」
　暦の長い男が言った。
「十一人目」
　合図のように手を振る男の足の下には、仰向けに血を流す遺体がある。その顔つきはイドニア人のものではなく、また装備も自組織で供給されてるものでない。敵側の遺体と一目でわかる。
　十一人目……どうやら被害も同程度らしい。果たしてこの泥仕合は、いつまで大地を赤くするのか。まだ一日の三分の一しか経ってないのに、ここはこんなにも血生臭い。
「戦車野郎は逃げたのか」
「あんな装甲こんな装備じゃどうにもならねえよ。逃げてくれてむしろよかった」
「……気に食わねえ」
「全くだ」
　あの戦車をどうにかしなけりゃならない。ありゃあその気になれば強行突破できる

くらいのシロモノである。
すぐに上層部に連絡が行き、対策は練られることだろう。国境を可視化したようなあの壁が、益々くずれていくかもしれない。
こうしてくだらない会話をしてる今でも、あの壁の向こうから狙撃されて、数秒後には死んでいるかも知れないのだ。感染症にやられて、高熱の悪夢から二度と目覚めないかもしれない。栄養が足りず、餓死してしまうということもある。こんな不安に二十四時間晒されて、命が惨めでないはずもなかった。

「いっそ核攻撃でもしてやればいい」
戦いは終わりの兆しも見せることなく、次から次へと敵を呼び寄せる。結末のない泥仕合などうんざりだった。先細りしてゆく補給のせいで、日に日に腹の音ばかりが増えた。長引く戦闘に苛立ちだけが積もり続けて心も削る。
「そんなことしたら自滅だよ。隣国ったたって壁一枚だ、近すぎら。核弾頭ひとつでこっちまで木っ端微塵になっちまう」
「わかってるよ、そんなこと」
ここは嫌いだ。ジェイクは思う。
戦場にうんざりするのはいつぶりだろうか。ここの空気はいつまでも好きになれそ

うにない。

―2―

「あの、兄のヘリなんですけど、ハッチ部分に赤いラインがペイントされてて……」
　黒い空、瞬く星々。その夜も苔むした壁に背中を預け、なんとはなしに光を数える。
また不意に風が吹きぬけて、足元のタンポポは綿毛を散らした。
　なんと物悲しい夜であるのか。彼女の声が聞こえた途端に、何度目かも数え忘れたため息が落ちた。昨日と同じ場所で空を見てたら、昨日と全く同じ時間に、昨日と同じ声が聞こえてきたのだ。ここは戦場であるというのに、彼女は隣国の――すなわち敵国の人間なのに。
「殺すと伝えたはずだ」
　ジェイクの返事は非情であったが、すぐにその迫力は消えてしまった。
　ぐう。
　腹が間抜けな音を出す。

静かな夜だ、きっと聞こえたことだろう。
——ああ、今鳴らなくたっていいだろうに。無理からぬことだ、最後に食ったマトモなものなど二日前で、それからは水とクソ不味いハーブ、けちなレーションで飢えを凌いでる。大体、空腹が空気を読んでくれるはずもないのだ。
気まずくなった沈黙に、ジェイクは次の言葉を考えている。なんだか今更、何を言ってもカッコ悪くなる気しかしないのだ。
だのに次に耳に入った物音は、予想外のものだった。
くぅ……。
そう、ジェイクよりは幾分可愛い、それでいて間違いなく腹の音が聞こえてきたのだ。
どうやら壁の向こうっ側も、ひもじさは大差ないらしい。
「…………」
「…………」
「あの……」
「あ……？」
「お腹空きましたね……」
「……うるせぇ」
だからどうということもないのに、殺意がどこかに消えてしまった。

壁にもたれ掛かって、銃に弾も装填せずに。きっとこの殺意を孕まない様さえも、彼女は読み取ってしまうだろう、それくらいに気が抜けちまった。
だけど、だからって、敵国と馴れ合えるはずもないのに。

「腹は減った。だがあんたと話すことはねぇ」
「……。それは、私が壁の向こう側の者だからですか」
「…………」
「兄は……、瞳がグリーンで、この辺りの国では珍しい色だったんです。……ごめんなさい、こんなこと……」
徐々に力を無くす声色は、また涙を堪えてる。ジェイクはロケットペンダントの写真を思い出していた。……ああ、あの写真の男も、同じくグリーンの瞳だったと。
この女の言う通り、セルビア語圏でグリーンの瞳は珍しかった。滅多に見ない。

「…………。グリーンの瞳の捕虜はいねぇよ。もう消えろよ」
ようやっとジェイクはそれだけ言った。
嘘ではなかった。〝捕虜はいない〟のだ。それに彼の見た遺体はローストされてて、目の色なんかわからなかった。だから、嘘はついていないのだ。

「もう来るな」

夜風。星。足元の花。

春は優しく芽吹いているのに、この地はあまりに優しくないのだ。

壁の向こうへペンダントを突きつけて、「この男が兄か」と聞いてしまえば、きっと話は終わるのだろう。もしかしたら彼女は売られてはなく、自らこの地を訪れたのかもしれない。――――兄を、探すために。そんな考えが浮かんでは消え、浮かんでは掻き消しを繰り返す。

背中の壁はじんわり冷たい。そして厚く、高く聳える。

この壁の内側だけが仲間であった。この壁の向こうは敵だった。すべからく。それだけのことだ。

—3—

認めたくないが劣勢だった。
隣国勢力は国軍さながらの装備を持って、昨日は一台だった戦闘車両も四台に増え、精度の高い銃でスナイプしてくる。あからさまな力の傾きを肌で感じた。どうやら敵は、本格的にこの傭兵部隊を潰しにきている。
なんたってこんなことになったのか。悪化はあまりに性急で、それは一秒でも早くジェイク達に消えてもらいたいという、敵側の思惑すらも透けてるようだ。
必死の抗戦で命辛々難を逃れた日暮れ前、ジェイクは寝床へ身体を引き摺る。この時既に、国境近くの拠点が二つ壊滅していた。
「遺体の装備を回収するぞ」
しかし休む暇も与えずに、リーダー格の男がそう言う。
「弾丸も武器も残り少ない。軍資金も」
「補給に期待出来ないんだ、死人のものを貰うしかない。敵に夜戦をするほどの地理感はないんだ、回収に行くなら夜の内だな」
御尤もだとジェイクは思う。問題はくたくたに疲れきってしまった事だが、そんなものは理由にならない。

・
・
・

ロケットペンダントの写真は、一組の男女が微笑んでいる。
二人が恋人でないのはすぐにわかった。顔がそっくりだったのだ。
二人ともセルビア語圏では珍しい髪と目の色で、上品な服に身を包み、優しい眼差しを向けていた。きっと本来ならば、戦場とは無縁の恵まれた生活を送っていたに違いない……そう思わずにはいられないほど、穏やかで幸せそうな笑顔であった。

どこかから口笛が聞こえてくる。
昨日の爪痕を色濃く残す戦場は、相も変わらず硝煙臭い。
弾薬の残りをジェイクが確認する刹那、口笛の音色が鼓膜を撫でた。きっとこんな状況下でなかったら、好きになってたメロディだった。
今日も壁の向こう側から戦車が来る。仲間を殺しにやってくる。こちらとは段違いな装備で、高性能な銃で、脳幹を潰しにやってくる。あの女のいる、国境の壁の向こうから。
口笛はすぐに騒音に呑まれて消えてしまった。――――いや、最初から空耳だったのかもしれない。一度ジェイクは目を閉じたけど、そこにはもう、戦いの足音しか響いていない。

「…………来やがったな、戦車野郎……」

銃を構えた。

昨日よりも大きく威力のあるものだ。

スコープにはもう、その日の殺し合い相手が蠢いていた。

3話

―1―

一つわかったことがある。敵の保有する戦車は、確認できる限り四台なのだが、そのうちの一台に桁違いの操縦士が乗っているのだ。

戦車は無骨な灰色の装甲をしているが、その一台は錆が進んで所々に赤褐色の斑がある。だから余計によく目立ってた。

「左右の履帯を互いに逆に動かして、激しく車体の向きを変えることを『超信地旋回』というう。これは滅多にやらねえことだ、何故だかわかるか」

かつて陸軍に所属したこともあるという、傭兵歴の長い男は言った。ジェイクは素直に「わからない」と先を促す。知識を披露する機会が嬉しいのか、男は饒舌に続きを述べる。

「超信地旋回をあんなふうに連続してやりゃあ、普通は履帯が外れるんだよ。最新式のモンならまだしも、あんな大戦時代の戦車じゃまず間違いなく」

そうならないのは、よほどのテクニックがあるからだ。そう言葉はしめられた。なるほどただモンじゃあないらしい。

「他の三台は？」
「大したことない。戦車を乗っ取れりゃあ、一日でお前だってあんくらいできるさ、ジェイク」
「なるほどな。道理で初日に一台だったってのに、翌日三台増えたわけだぜ」
連日の衝突は、それまで散発的だった隣国の干渉の仕方とは、まるで性格の異なるものへと変貌していた。事情が変わったのか、指揮官が変わったのか。あるいは戦車という戦力を得て、作戦が変わったのかもしれない。
「で、どうすんだよ。相手に面倒なのがいるのはわかったが、対策がないんじゃ意味がねえ」
国境付近に構えた拠点は、疲弊や壊滅で残存戦力など当初の半分も残っていない。このままでは、市街地で目を光らせるイドニア国軍から、いつ挟み討ちにされてもおかしくなかった。早急な対策を練るか、あるいは撤退するのも一つの手だ。彼らは信念のもと戦う兵士や戦士ではなく、あくまで傭兵なのだから。
「対策はあるさ。昔っから、戦車にはコレって鉄板がある。残る軍資金をありったけ注

ぎ込んだ」
年輩の男がにたりと笑う。そして、親指が一つの木箱を指さして見せた。どうやら今朝方、ようやっと届いた〝対策〟らしい。
「――――なに？」
「地雷さ」

・・・

黒い空には今夜も星座が瞬いている。
苔むした壁に背中を預け、なんとはなしにそれを数えるけれど、星座なんかに興味はなかった。
言うならば時間を潰してるだけかもしれない。いつも、大体似たような時間に声をかけてくる、壁の向こうの女が来るまで。
風が吹けば、戦場とは思えない静けさが身を包む。足元のタンポポが物悲しげに綿毛

を散らす。手の中には、やはりあのロケットペンダントが握られている。

「あの、……居ますか?」

控えめな声が、壁の向こうからそっと聞こえる。

ジェイクは彼女の名前を知らない。彼女も、ジェイクの名前を知ることはない。互いに名乗ろうとしなかったのは、知るべきでないと思ったからだ。彼女が一般人であろうとも、壁の向こうというだけで敵なのだ。名前など知らない方がずっとよかった。

「……ああ」

何度言っても彼女が来るのをやめやしないから、バカらしくなって「来るな」というのをやめたのは何度目の夜からだったか。生ぬるいことだとジェイクは思う。仲間が知ったらきっとタダでは済まないだろう。なのに、何故今夜も話しているのか。

「お前の兄貴は……今日も見てない」

「そう、ですか……」

「ああ」

彼女は本当に兄が好きなのだろう。聞いてもないのに兄のことが語られるから嫌でも覚えた。切れ長の目だとか、瞳の色とか、髪型だとか髪色だとか。そのたびに、ジェイクはあの黒焦げのパイロットを思い出す。そして写真の男が、彼女の挙げる特徴全て一致してるということも。

何故聞かないのか。お前の兄貴はこのペンダントの男かと。

何故言わないのか。この男はもう死んでいると。

自問自答の答えはつかみかけていたけど、それに気付かぬふりして蓋をしていた。考えたくもないことだからだ。

「……この間、祈りを捧げる日があったんです。そちらの国にも、そういう風習はありますか？」

「……そういう祝日みたいのは、イドニアにはない」

「そうですか……。私、兄の無事を祈ったんです。それから、あなたの無事も」

お天気なことを言う女と思った。敵国の、顔も名前も知らない男の無事を祈るのだから。彼女は平和ボケしてるのだろうか。

「俺の無事なんざ願ったら、反逆罪になるんじゃないのか」

「私、国軍とかじゃないですから」

「だろうな」

この穏やかな時間を、どうして断ち切れないのだろうか。戦場に生き、冷徹さを身につけてきたはずなのに。愚かしいとわかっているのに。

「唄をね、歌うんですよ。口笛を吹いたり、町では楽器を奏でることもあります。生者の無事と、死者の鎮魂を祈る唄だと母に教わりました」

ジェイクはふと数日前に、聞こえた口笛を思い出す。

今日まで熾烈さは増すばかりの日々だった。銃弾が頭を掠ったことすらあったのだ。だのに未だに軽傷で済んでいるのは、存外祈りとやらが通じたからか。――――なんて、そんなことを考えるくらいには、この空気に絆されている。

「お人好しだな、あんた」

「そんなことないですよ」

「いや――――ありがとう」

月が徐々に細くなってく。
空の闇が深い分だけ、星の輝きは美しかった。

―2―

対戦車地雷は人が踏んだ程度では起爆しない。
逆に、対人地雷を戦車が踏んでもダメージを受けることはない。
ならば戦車を軸に歩兵が攻撃してくる隣国のケースに対応するには、対戦車地雷と対人地雷の複合地雷原にする必要がある。
国境付近を地雷原に変えてしまえば、オタワ条約がどうのと煩い連中が来るのではないか。 ジェイクは咎めるようにそう指摘したが、発言の裏側には壁の向こうの女がいたことは否めない。
彼女が兄を案ずるあまり、国境を越えようなんて真似をしたら……、いや、ジェイクと毎晩そうするように話にくるだけでも危ない。
「オタワ条約に触れるってことは、他国軍がここまで進軍する理由になっちまうんじゃ

ねえのか」
「裏ルートで仕入れた地雷だ、政府が地雷原に気付くのはずっと先だろうよ。その頃には俺たちはもうここにはいない」
「地雷を置きっぱなしにしてくのか」
「なんの問題が？どうせ足はつかない」
「…………いや」
「ジェイク、お前、地雷を使いたくない理由があるのか？」

対人地雷が世界中から批判されるのは、無差別の殺傷兵器だからだ。しかも大半の被害者は非戦闘員で、死、あるいは恒久的な身体障害を伴ってしまう。つまり、ただ兄を探してるだけの彼女ですらも死んでしまうリスクが高い。遺憾なことに地雷の設置予定地は、毎夜彼女と語らった地点までも含まれている。そして紛争が終わっても、地雷は誰かが踏むまでその場に居座り続けてしまう。

「まさか、人道的にどうだとか、そんな眠たいことは言わないだろう？」
地雷を使いたくない。彼女が踏んでしまうかもしれないから。……なんて、言えるはずない。そもそも彼女の名前も知らない。

「言うかよ」
素っ気なく吐き捨てる様もポーカーフェイスも、年齢以上に長けてたはずだ。だから、周りの仲間は「だよな」と笑いあっている。
「全部、深夜に設置しにいくぞ。今夜は新月だ、真っ暗で気付かれにくい」
この一帯が地雷原に変わってく。彼女と会話することもきっと出来なくなるだろう。地雷に巻き込まれるわけにはいかない。
隣国が戦車なんざ持ちださなければ、こんなことにはならなかった。あんなふうに攻めてこなけりゃ、それなりの争いで済んでいたのに。
顔も知らぬ戦車乗りを、恨みたくてしかたなくなる。
「どうせ明日も奴らは来る。見張りはいつも通り、休める順に休めよ」
作戦会議と呼ぶにはぞんざいな、非人道的な方針が定まった瞬間である。
今夜、地雷原が出来上がる。彼女と会話を重ねた場所も、地雷原に変わってしまう。
ジェイクはその日も壁へ向かった。
いつも彼女と語らう時間まではあと三十分。
地雷を埋める時間までは、あと三時間ほどだった。

—3—

「え……、イドニアでは、ハーブをそのまま食べるんですか……？」
「いや、イドニアだけじゃない。米国人なんかも食うらしい。軍隊上がりの知人に聞いたが、応急処置にもなるんだとよ」
「苦くないですか……？私たちは、サラダとか、スープとかにしてます」
「まあ、苦い。スープなら美味そうだな」
「美味しいですよ」

何気ない日常の会話が、不似合いだと自覚はしていた。
……ああ、やめよう食事の話は。どちらともなくそう諌め合う。また腹が鳴っちまうから。
最後に食ったのは痩せ細った四センチほどの小魚なのだが、それなどまだマシな方で、カエルや虫を食った奴もいる。死体を食った奴がいるなんて噂も立ってるくらいだ。

ジェイクは肌色は黒くなり、手首が細くなったことも実感していた。熾烈な環境だ。ストレスもあった。だけど、壁の向こうの彼女との会話に、いつしか安心感を与えられてた。だからこそ、また胸は痛みを覚えているのだ。
新月だけあっていつも以上に闇は濃く、また少し肌寒い夜だった。
こんなに穏やかに話しているのに、あと数時間で地雷を仕掛ける手筈となってる。それを踏むのは、彼女かもしれないとわかっているのに。

ふあ、と彼女の欠伸が聞こえた。
気付けば時間はすっかり経ってた。

「あ……ごめんなさい」
「いや、いい。もう寝ろよ」
「はい。じゃあ、また明日」

明日――――。いや、明日の夜には、ここも地雷原に変わってる。呑気に歩けば運が良くても足が飛び、運が悪けりゃバラバラになる。
だから、きっと〝明日〟はもう来ないのだ。彼女と話せる明日は来ない。もう。

「いや……」

〝地雷を埋めるから、もうここに来てはいけない〟

これを敵国の人間に伝えることは、自軍に絶滅の危険を与える。

対人地雷の使用がバレたら、オタワ条約違反として、国軍のみならず大国の介入も考えられる。そうなれば雇い主はトカゲの尻尾を切るだろう。「傭兵達が勝手にやったこと」として、追われ、捕らえられ、殺される。圧倒的な戦力達に。

――――言えるはずない。

答えはシンプルにこれだけだった。言えるはずもないことなのだ。

「その、あんたの町がどのくらいの距離か知らないが、こんな国境近くじゃ治安はクソみてえなもんだろ。もう来ない方がいい」

「どうして急に……」

「明日からもっと酷くなる」

「……酷く？ どうして……」

――うるせえな、地雷を使うからだよ！

そう言えたらどんなに楽かと、腹の中で唸りが上がる。言えない。けど、言いたい。でなけりゃこの女は、きっとまた来てしまうから。だけど言えない。嫌な葛藤に唇を強く噛み締めた刹那、ジェイクはポケットの感触を思い出す。

……そうだ、彼女は元々、兄を探してここに来ていた。ポケットから、ロケットペンダントをそっと取り出す。落ちたヘリの遺体から回収したペンダントには、彼女の話と特徴の一致する写真が込められている。彼女が、ここに訪れる理由の答えそのもののように。

「……とにかく、もう来るな」

もっと早く渡してやればよかったことだ。

何故聞かなかったのか、お前の兄貴はこのペンダントの男かと。

何故言わなかったのか、この男はもう死んでいると。

何故か後回しにしたくなって、今日まで「知らない」と言い続けてきた。彼女の兄が死んでいること。

もっと早く伝えていれば、彼女はとっくに、ここに来ることなどなかったのに。

「でも……」

ペンダントを放り投げれば、あっさりとそれは壁の向こうへ姿を消した。

土の上へ、金属の沈む音が聞こえる。同時に彼女が息を飲む音も。

多分、いやきっと、好きだったのだ。彼女と話すのが好きだった。いつの間にか好きになってた。だから言えなかったのだろうか。

「落ちたヘリの遺体から回収したモンだ」

彼女の声が好きだった。喋っていれば安らいだ。あの、戦場に不似合いな、コツコツと鳴るヒールの音を覚えるくらいに、彼女の存在に救われていた。敵国の人間だったのに。

お前の兄貴か。

そう尋ねることはしなかった。

やがて壁の奥からは、すすり泣きだけが聞こえてきた。

終話

―1―

鳥の死骸は翼が焦げてた。それを足蹴に傭兵達は息をひそめる。ギリギリ壊滅しないだけの状況と、極めて深刻になった食料問題に、傭兵は皆餓鬼のような目つきになってる。

崩れた壁の向こうから、今朝も進軍は確認された。

昨日までと決定的に異なることは、一帯が既に地雷原だということだった。

早朝、ここ最近とはうってかわって、突き抜けるような青が広がる。戦火で焼くには惜しいくらいに、その朝日は美しかった。

「いいぞ……来い、もう少し……」

物陰に潜む一人の男が、地雷原の目前まで進行してくる戦車や敵を前にほくそ笑んでる。地雷作戦を決行した、傭兵団のリーダーだった。飢えのせいでげっそりとこけた頬や落ち窪んだ眼孔が、宿す狂気を悪質なものへと変えてしまってる。

ひでぇ面だと思った後に、しかし自分も似たようなものかもしれないと、ジェイクは皮肉気に苦笑を漏らした。

今回使用した対戦車地雷は、マインローラ部通過後に通過予想時間で爆発する時限式タイプだ。また、対人地雷も同じく〃一度踏まれてから一定時間で爆破する〃タイプのものを採用している。

これは、戦車破壊後に撤退する人間を狙い撃ちにするためだった。

ジェイクは最前線で銃を持ってる。地雷の爆破に巻き込まれないギリギリの距離だ。対戦車地雷の目的は戦車の破壊ではなく機動性を失わせることにあり、一発でも踏めば履帯が切断し走行は間違いなく不能となる。行動不能になった戦車に、とどめを刺すために対戦車兵器は用意されてた。いつの時代も、地雷とミサイルはセットになってる。対戦車のセオリーなのだ。

「――――おい、あいつら、なんで突っ込んでってるんだ……?」

その時ジェイクが疑問を述べたのは、味方が交戦しようと前進しているからだった。

あの辺りはもう、地雷原になっている。深夜にジェイク達が埋めたのだから間違いな

い。だのに一部の兵は勇猛果敢とはこのことであると言わんばかりに、武器を取って立ち向かってゆく。信じられない光景だった。
「あんなところでドンパチしてたら、爆破に巻き込まれるだろっ……」
明らかに爆破の範囲内で銃を構える味方の数は、十や二十じゃききそうにない。
何故……、そう目を見開けば、傍らでリーダーがにたりと笑った。
「全員で後方に引いちまったら、怪しいって馬鹿でもわかる。あいつらは、あそこに地雷があると知らない」
「……教えてないのか？」
「あいつらは長引く戦いの怪我や栄養失調でろくな戦力にならなくなってた。あるいは精神の方がイカれかけてた奴もいる。でもな、壊れた身体でも、使い道はちゃんとあるんだ」
「なに、言ってやがるんだ……」
「作戦なんだよ。囮は必要だった」
――――狂ってやがる！
そう叫び出したい衝動が、胸の中で暴れ出す。

残る軍資金を全て突っ込んで決行したのが此度の地雷作戦だった。失敗するわけにはいかない、その事情はわかってる。だが、こんな手段を、人が人に行うなどあって良いのか。

イドニアは酷い状態だった。国内難民は増加を辿り、失業者もまた比例して増え、治安は地獄へ転がり落ちてた。国内外で量産されては紛争地帯になだれ込んでくる傭兵たちは、量産品ゆえの消耗品のような扱いになる。

……此度の戦線は、そんなイドニアにおいても一、二を争う熾烈な国境での募集であった。命が安請合いされるのが常々なのに、この地の報酬だけ頭一つ抜きん出ていた。ジェイクの属する傭兵団が素早く手を挙げ、そうして着いた戦線でもある。……実際の過酷さは既に語った通りであるが。

疲弊や怪我、あるいは精神力の弱い者から、ああして囮の役に選ばれるのなら――ジェイクは思う。あの女、壁越しに語らったあの女がいなかったなら、自分も今頃……地雷原に突っ込んでたかもしれないと。

体力や回復力が若さ故のものであるなら、精神の未成熟さや場数の少なさだってまた、若さ故のものなのだから。

……あれが未熟さ故の動揺なのかは、現在のジェイクにもよくわからない。ただ、あ

の瞬間に感じた胸糞の悪い気持ちは、今でもよく覚えてる。
スコープ越しにまばたきをした刹那のことだ。
最初の火柱が空へと登った。

―2―

毎晩、星を見ていた。
壁を挟んだ静かな会話は、いつしか銃を握ることすらしなくなり、芝生に寝転がったことすらあった。
彼女との会話は兄の話題や自国のこと、他愛ないそれが増えてゆく。穏やかな心で、ジェイクは耳を傾けていた。時折星を見、夜明けの近い空の片隅に、星たちが追いやられる様に切なさを感じ。
幾分かの、食料とも呼べないような粗末なものを口にしながら、体力も精神も疲弊さ

せる戦地の中で、唯一心の弛緩できた時かもしれない。
彼女の、小気味よく鳴る靴底の音が好きだった。特徴的なハイヒールのあの音が。

・・・

「やった、やったぞ!!」
歓喜に震える唇が、興奮気味に唾を飛ばしてる。
――――戦車が。あの、憎き戦車が、アッサリと煙を上げて停止したのだ。それも、赤褐色の車体を仕留めた。
「撃て、撃てっ、早く、あれだけは仕留めろっ!」
一台だけ別格の操縦士を乗せた車体がある――――それがあの赤褐色の戦車であった。あの車体に、今日までどれだけの被害を出されたものか数え切れない。たくさんの仲間を殺されてきた。
赤い車体の後方に控える三台のうち、一台の戦車のハッチが開いた。パニックに陥った操縦士が逃げ出そうとしたためである。

対戦車地雷は推定百五十キロ以上の重さにしか反応しない。つまり、戦車で踏めば爆発しても、生身で踏めば爆発しない。ただし冷静でないが故か、対人地雷との複合地雷原の可能性やら、時限式の可能性まで及ぶことはなかったらしい。

「ウワアアア」

どこぞしこから聞こえる悲鳴が、敵のものか味方のものか、それすらジェイクにはわからなかった。

逃げ惑う歩兵が対人地雷に飲まれて砕ける。それを見て今度は、ハッチの開いた戦車に人が群がってくる。対人地雷の威力では、戦車の装甲は壊せない。

その時ジェイクの真横を突風が突き抜けた。味方の対戦車ミサイルの弾道である。命中精度こそイマイチな安物だが、機動力を失った戦車を仕留めるには十分である。ミサイルは不安定な軌道を描き、人々と戦車を巻き込みながら火の手をあげた。

対戦車地雷と対人地雷が交互に轟く。

あっという間だった。あっという間に、ジェイクの視界は火と黒煙の二色となった。空の青さなどもはや見えない。

あれだけ苦労を要した戦車が、圧倒的な装備の差に苦しめられた隣国が、気付けば壊滅状態だった。結局ジェイクの持つ銃は、ただの一発も発砲されることもないまま――

――。

真横で、リーダーがケタケタ笑ってる。
黒煙がゆっくり禿げてゆくと、浮かび上がる死体の数に益々声が大きくなってく。
いや、死体と呼ぶべきかもわからなかった。血も死に顔もクソもなく、殆どが黒焦げで、身体と呼ぶには未完成な肉塊だった。
目の仇だった赤褐色の錆びた戦車も、他の三台同様にもはや原型を残していない。車体の下半身はひしゃげて走行不可能なまま、集中する手榴弾や数発のミサイルを受けてきたのだ。機銃は折れ、側面には穴が空き、ハッチは歪んでエンジンは煙をあげていた。中に人が残っていても、生存など不可能だろう。

終わった。
ジェイクは思う。
もう、終わった。
敵を壊滅させる代わりに、ここらを地雷原に変えてしまった。
この大地も死んでしまった。
戦線も全て、〝終わった〟のだとジェイクは思った。

その時である。
討ち滅ぼされた戦車の中でも、比較的原型を残す――――とは言え大破と言って過言でないのだが――――一台が、カタリと音を立てたのは。
ジェイクは驚き目を見開いた。
ハッチが、開いたのだ。
そして中から、一人の兵が姿を表す。見渡す限り地雷原のあの場所で、あれが唯一の生き残りである。
割れたスコープが両の瞼に破片を突き刺し、もはや視力は無いとわかった。破れかけの防弾ベスト。すべて隣国の装備である。
あれは……敵だ。
死にかけた、敵だった。

―3―

「あれは……」

目だけでなく足も負傷したのだろうか。歩き方のひどく不自然な生き残りが、よろよろと力なく歩き始める。
やはり見えていないのだろう、生き残り兵士は両手を前に突き出して、視力の代わりに指で現状の手掛かりを探してる。

「殺しますか……？」
男の一人がリーダーに問う。だがリーダーは、ニヤニヤ笑ってそれを否した。撃つまでもなく、あそこは地雷原の真ん中なのだ。もしかしたらリーダーは、最後の一人が爆破で吹き飛ぶところを見ようとしているのだろうか。
この時ジェイクは、あまりのことに凍り付いたように硬直していた。唇はわななき、目は見開き、目の前の現実を上手く飲み込むこともできないまんま、〝他の可能性〟を探し続けた。

まさか。
まさか。
なんで。

なんで。

生き残った〝そいつ〟の首には、あのロケットペンダントが揺れているのだ。
昨日〝彼女〟に渡したはずの、彼女の兄のペンダント……見間違えようはずもない。
あの生き残りが、それを大切そうにぶら下げている。
これがどういうことであるのか。わかりたくない、理解したくないとジェイクは思う。

かつてペンダントの写真で見たのと、全く同じ色の長髪さえも。

毎晩聞いたあの足音が。
ハイヒールだと勘違いした、あのコツコツと鳴る〝彼女〟の足音が、どうしてあそこから聞こえてくるのか。背中の産毛がゾワゾワ逆立つ。彼女と語らった色々なものが、頭の中を突き抜けてゆく。
――ハイヒールでは、なかったのだ。
黒い煙の隙間から、ジェイクにはそれがハッキリと見えた。
彼女はハイヒールなど履いてなかった。
ただ、義足だったのだ。だからコツコツという音が聞こえた。

わかりたくなかった。あの生き残りが〝誰〟であるのか。
そんなこと、理解なんかしたくなかった。
どうしても符合を否したかった。

「……くそ」
半ば無意識に、唇の隙間から声が落ちる。
傍らのリーダーが、ジェイクに不信な視線を寄越すが、それを気にする余裕もなかった。
両目の潰れた生き残りが――――いや、彼女が、「誰か助けて」と口にした。
その瞬間、ジェイクは声をあげていた。
毎晩聞いた、彼女の声に、無意識に声をあげていたのだ。

「動くなっ!!」

星を見ていた。
タンポポも見た。
苔生したあの壁に背を預け、この戦場で、唯一安らいだ時間があった。

彼女は、この声にジェイクと気付いたろうか。
そんなことはわからないけど。
「地雷だっ、下手に動くな!・ぶっ飛ぶぞ!!」
彼女は軍人ではないと言っていた。
そりゃあそうだ、軍にしちゃ装備が時代遅れで、隣国の敵が国軍でないとずっと前からわかっていたのだ。
それに、ジェイクだって軍人じゃない。傭兵だった。
彼女は嘘をついてない。
軍人でないと言っていたけど、戦闘員でないだなんて言ってないのだ。
「伏せてろ!・今そっちへ行く!!」
初めまして、ではない。
久しぶり、でもない。
初対面であって初対面でない、不思議な感情が湧きあがってる。

　信じられないものを見るような目で、仲間たちがジェイクを睨んだ。
「う、撃ち殺せっ」
「やめろ、もうこっちの勝ちはわかってんだろ！」
「おい、ジェイク！」
「あいつ一人殺してどうする！」
「助ける理由もない！敵だ！」
「『助けて』だ、聞こえたろ！どう見ても降伏してるだろ!!」

　瞬間、空に一発の銃声が響く。
　腹を貫通した弾丸に、彼女の身体がくの字になった。バランスを崩し、今にも倒れ込みそうに。
　時間差で彼女がこぽりと血を吐く。

「やめろ!!」
　ジェイクは怒鳴り銃弾の発射元を見る。それは、不愉快そうに銃を構えたリーダーだった。彼は何の感慨もなく、もう一発引き鉄を弾く。
　パァンと乾いた音が響いて、今度は、彼女の近くの地面が爆ぜた。その音に彼女がビ

クリと怯える。
着床を待ってたタンポポが、綿毛をふわりと散らしてく。
「やめろ！降伏してるだろ！もう終わった、全部！！」
ジェイクがリーダーの銃へと手を伸ばす。リーダーはその手を払いのけ、再びアッサリと引き鉄を弾く。またも狙いは決定打を僅かに外れ、銃弾は片方の義足を貫いていた。
痛みはないが、いよいよバランスを保てなくなった彼女が倒れる。
「あいつにもう交戦の意志はない！」
覆い被さってくるジェイクを、肘で押しのけてはリーダーがまた銃を構える。バレルの角度を力任せに空に向けさせ、ジェイクは彼女を確認する。
……もう、駄目だと、すぐにわかった。
両目が潰れ、腹に穴が空き、血が泉のように湧き出てる。哀れな生き残りは血まみれになった自らの手で、ロケットペンダントを握り締めてた。祈っていたのかもしれない。

彼女はきっと助からない。
けど、まだ、生きているのに。

「不愉快だ！あの女！」
「降参だろ、どう見ても！あいつに戦意が見えるのか、てめえはよっ!!」
「お前こそ自分のやってることがわかってんのか！俺に逆らって、ここにいられると思ってるのか!!」
「わかってるよ、畜生！」

次にジェイクの振り上げた手は、制止ではなく完全な攻撃の意志を持って振り下ろされた。硬く握り込まれた大きな拳が、全力をもってリーダーの頬を打ち抜いたのだ。
あまりの強さに目を白黒させるリーダーに向かい、ジェイクの拳は容赦のない追撃をした。脳震盪が起きたのか、リーダーはそのまま前のめりに倒れてしまった。
なにが傭兵団だ。
なにが囮だ。
なにが敵だ。畜生が。
言い切れない胸糞の悪さに、どす黒い感情が止まらなくなる。

不幸中の幸いなのは、リーダーが気を失ったあと、ジェイクを咎める仲間がいなかったことだ。
此度の地雷作戦の強行に、あるいは囮に、傭兵団内でも不満は高まってたのかもしれない。
もう、走り出すジェイクを、止める者は誰もなかった。

—4—

一帯の黒煙が捌けた頃、空には茜色が迫り出してた。
あの後、傭兵団がどのように動いたのかは知らない。ジェイクは団を離脱した、戻る気もない。きっとこれからも、集団に属することもないだろう。
少年と呼ばれる歳で武装の必要に迫られた彼に、「傭兵団」という媒体は都合の良いものだった。だが既に身体は成長期を経ているし、銃の扱いも、戦場の場数も、経験値と呼ばれるものは存分吸えた。戻る理由も最早無かった。

瓦礫の山の隙間から、燃えてしまった大地が見える。禿げた芝生の中でわずかに、生き残ったタンポポが見える。
夕日で伸びた自分の影が、それらを黒く染めていた。
彼は腕に、息絶えた彼女の身体を抱える。最後の約束を果たすため。

・・・

ジェイクは彼女の傍らに立っていた。戦車と遺体の上を辿ってきたため、地雷が爆破することはなかった。
「おい」
いつ死んでもおかしくないほど、衰弱しきった彼女にそう呼びかける。大量の出血でかさかさになった、彼女の唇が僅かに動く。

壁の――――？
そう、吐息と変わらないほど細く小さくなってしまった、彼女の声が問い返す。
例えばここに医者がいて、応急処置をしてやれたって、それでも彼女は助からない。素人目にもそうとわかるほど、彼女の傷は深かった。
ジェイクは肯定も否定もせずに、彼女をゆっくり抱き起こす。

この声、髪色、首から下げたペンダント、特徴的な足音のする銀色の義足。これから死ぬこの女は、間違いなく毎夜語らった彼女であった。

「……つかまれよ、連れてってやるから」

「……どこに……」

「お前の、……兄貴のいるところだ」

・
・
・

地雷原から、どれほど離れたものだろう。

ジェイクが彼女の死に気がついたのは、緩やかな丘をゆっくり登る道中だった。まだ体温も柔らかさも残した身体で、しかししがみつく指の握力がずるりと抜けて、ジェイクは抱えた彼女を見下ろす。

今際の際の言葉もないが、その死に顔は、穏やかな微笑のようにも見えた。

悪い足場を人一人抱えて移動するなら、それなりの時間を要してしまう。女の身体は

軽いものだと思っていたが、死して完全に力が抜けてしまうとそうでもなかった。彼女が息を引き取ってから、急に体重が増えた気さえするほど。

向かったのは、ヘリの落ちた場所だった。

彼女の兄貴が死んだ場所。ロケットペンダントを手に入れた場所。

あの時物資をいただいた後、ヘリは放置されていた。その死体も同様に。

きっと今頃は死臭が漂い、ネズミが死肉を漁ってる。虫も湧いているだろう。弔う者などいなかったのだ。

それでもジェイクはヘリに向かった。彼女が、あれだけ会いたかった兄なのだ。ならば最後の最後くらいは、並べてやるべきだと思った。

彼女が自分に安寧を与えてくれてたように、自分も彼女に何かを与えられていたのだろうか。

これは恋などではなかった。

彼女はこれまで知り合ったことのある――――ある意味では嫌煙してきた――――他の女と変わることもなく、よく喋り、穏やかで、そしてアッサリ死んでしまった。

これは恋ではなかったけれど、それでも、死んでほしくない女であった。敵国の人間だったとしても。

夕日が沈む。
自らの影が濃くなってゆく。
この黒々とした色を見るたび、これからもきっと、彼女を思い出すのだろうとジェイクは思う。名前も知らなかった彼女のことを。死んでしまった彼女のことを。毎夜語らったその日々とともに。
落ちたヘリの残骸の中、朽ちた兄の遺体の横に彼女を並べる。
「…………じゃあな」
そう言って、ジェイクはヘリに火をつけるのだ。棺みたいに。火葬みたいに。

—5—

「久しぶりだな、スーパーガール」
　急にアメリカからやって来たシェリーに、ジェイクはそう淡く笑った。
　前約束も無しに唐突に、彼女は「任務の帰りにイドニアに寄るわ」なんて言って来たのだ。彼女はいっつもそうだった。中国やら海底油田やら、一連の騒動の後も相も変わらずに。
「急に来ても大丈夫だった?」
「構いやしねえが、居なかったらどうするんだよ」
「だって休暇って聞いてたから……」
「あのなぁ……」

　風が吹く。足元のタンポポが綿毛を散らす。
　あれから何年経ったのだろうか。地雷は数年前に、オタワ条約を理由に介入してきたアメリカによって撤去され、戦火に焼かれた一帯も緑を回復させている。
　壁は変わらず聳えたままだが、昔より苔が増えていた。
「ま……いいけどよ」
「綺麗な場所ね、ここ。風が気持ちいい」

「星もよく見えるぜ」
イドニアは不安定なままではあるが、それでもマシになってきている。ネオアンブレラが壊滅し、沈静化が一気に進んだせいかもしれない。
人間同士の争いが激減したものの、代わりにバケモノが増えちまったから、結局仕事は忙しくなっているけど。
「……ジェイク、もしかして何かあった？傷心に見える……」
あの頃と変わらない夕日の赤さに、あるいは自らの影の黒さに黄昏ていると、不意にシェリーがそんなことを口にする。
ジェイクはクスリと笑みを零した。
「傷心って……違ぇよ」
「そう？なら良かった」
「ああ」
あの日燃え尽きたヘリも何もかも、今は残骸すらも残さないのだ。全ては胸の中にだけある。時折ちくりと痛むものも全て、ジェイクの胸の中だけに。この痛みだけが、彼女を確かめるただひとつのものなのだ。

「歯型みてえなモンだ。傷心じゃない」

そう言って、ジェイクはシェリーの頭を撫でる。

シェリーは「子供扱いしないで」と、頬を膨らませてみせるのだった。